

のガラスが、ガチャーンと割れ、瓦がものすごい音で、ガラガラガラガラと落ちてきました。泣いていた友達がその音にびっくりして、ますます大きな声で泣きました。私も泣きたくありません。でも、ぐっと我慢して、「大丈夫だから大丈夫だから」と、何度も言いました。

空から雪が降ってきました。ジャンパーを着ていなかったもので、寒くて体が震え、「寒いよお」と言いながら、みんなで固まっていました。その後も余震が何度も来て、校庭がぐらぐら揺れました。そのたびに、みんなの泣き声が大きくなりました。私も「これからどうなるんだろう」と思うと、涙が出てきました。

津波で北上川が逆流するかも信じられない思いで避難所に

何分かして、おじいさんが学校に迎えに来てくれました。おじいさんの顔を見て、「おじいさん、よかった」と、ほっとしました。車の中がとても暖かく感じました。

家に帰ると、家の中は、花瓶や植木鉢が倒れていたり食器が何枚も割れていたりして、めちゃめちゃになっていました。家に帰って家族に会えたのはうれしかったけれど、余震が来るたびに不安になり、家が崩れてしまうような気がしました。

おじいさんが近所の人から、「大きな

地震発生後に沿岸部を襲った津波の映像がリアルタイムでテレビ中継されました



津波が来るらしい。北上川が逆流するかもしれない」という話を聞いてきました。「ええっ、北上川が」。私は信じられませんでした。北上川は家のすぐそばです。ここは海から遠いのに、そんなことであるのかなと思いました。

「どうする」「避難するか」と、おじいさんとおばあさんが話し合っていました。そして、すぐに避難することになりました。私は急いで毛布と上着を持ち、家族で町のふれあいセンターに避難しました。ふれあいセンターの中は、避難してきた人でいっぱいでした。知らない人ばかりなのかなと思ってい

たら、友達は何人かいたので、少しほっとしました。夜ご飯は、乾パンと非常用の炊き出しご飯でした。少なかつたけれど、それだけでもおいしく感じました。停電だったので、ストーブの火だけが周りを明るく照らしていました。夜は一人一枚の毛布で寝ました。夜中に何度も、数えきれないくらい余震が来ました。そのたびに、係の人が走ってきてストーブの火を消しました。「うわあ、怖いよ」「大丈夫、大丈夫」友達3人で励まし合いながら寝ました。余震のたびに目が覚めて、夜がすごく長く感じました。外が明るくなってきたときには、「やっと朝が来た」と思いました。

家に帰ってからも不便な生活 電気がついて家族で喜ぶ

避難所生活は4日間続きました。4日目には避難所に隣の南三陸町の人があるということになりました。北上川ももう大丈夫だろうということで、家に帰るようになりました。南三陸町は大きな津波が来て、たくさんの方が流されたと聞いてびっくりしました。北上川も、家のそばの辺りを何十センチの津波が上っていたそうです。本当に大きな津波だったんだとあらためて思いました。

家に帰ってからも停電は続き、ろうそくの明かりで生活しました。近所の

人と炊き出しをしてご飯を食べました。お風呂にも入れなかったため、体がべとべとしました。

暗くなると茶の間に布団を敷いて、いつ地震が来ても逃げられるように服のまま寝ました。「早く余震が収まるといいんだけど」「電気がつかないかな」「しょうがない。がんばろう」。お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさん、兄、私、家族みんなが同じことを思い、過ごしました。

一週間ぐらいたって電気がついたとき、「やったあ」「明るいね」「テレビ、テレビ」。家族みんな大喜びでした。

大震災から数カ月が過ぎ、私の生活はすっかり元に戻りました。学校では友達と勉強したり遊んだりし、家では家族と楽しい生活を送っています。

近くの町は大津波で家が流され、たくさんの方が亡くなりました。テレビで見えたとき、びっくりして声が出ませんでした。何かしてあげたいと思ひ、学校の人みんなで募金をしました。電気があって、水があって、普通にご飯が食べられることが、実は一番幸せなことなんだと思います。

被害を受けた人たちが、一日も早く今までのような暮らしに戻ってほしいと強く願っています。そして、これから私は普通に生活できるように感謝し、家族や友達を大切にしながら過ごしていきたいと思っています。

● 支え合いから生まれた新たな絆 ①

「ありがとう」に万感の思い コミュニティの底力を感じる

地元施設に津波被害の小・中学生を受け入れる

平成23年3月11日、午後2時46分、東日本大震災が発生しました。

4月14日と15日、旧善王寺小学校校舎と平筒沼Youyou館に、南三陸

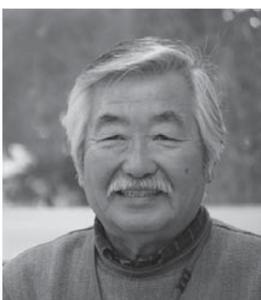
町からの二次被災者の受け入れが決定。急ぎよ、地元の吉田コミュニティ運営協議会の役員や行政区長会、米山町ボランティア連絡協議会などのボランティアが招集されました。しかし、市側の連絡体制が徹底されていなかったため、地元参集者が解散後、避難者

が入所するという不手際も起きてしまいました。

南三陸町からの避難者については、平筒沼Youyou館に40人、旧善王寺小体育館に80人、また旧善王寺小学校の校舎には戸倉小学校と戸倉中学校の児童生徒を受け入れることを確認しました。

緊急役員会（コミュニティ役員、区長会、ボランティアグループなど）をYouyou館で開催し、今後の対応方針などを協議しました。そして、次のことを確認しました。「自分たちができる範囲のお手伝いをする」「震災の話は聞き役に徹する。自分たちから話題としない」を活動の核とすることです。

4月22日、吉田コミュニティ運営協議会が管理している善王寺コミュニティセンターの利用は、戸倉小学校と戸倉中学校に限り、平日の授業での利用を認めることにしました。仮設トイレの設置や施設管理の明確化など、子どもたちの教育環境の整備を急ぎました。



吉田コミュニティ運営協議会 事務局長 吉田公民館館長 菅原 直行 さん

原発事故の影響 放射線量を測定

福島第一原子力発電所事故の放射能汚染に対する市民の関心が高まったことから、市では簡易型放射線量測定器を購入。消防署や市内学校、社会教育施設などの空間放射線量の測定を開始しました（6月21日～）。また、市内の稲わらを県が調査した結果、暫定基準値を超える放射線セシウムが検出されました。このため、国の指導を受け市内24カ所に汚染稲わらを一時保管しました。当初、一時保管の期間は最長でも2年としていました。しかし、国の指定廃棄物最終処分場の候補地選定が遅れ、現在も一時保管の状態が続いています。



▲毎日の空間放射線量を測定

あの震災を
特集 忘れない